

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2014年3月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.25

<4月にやるべきこと!>

私事で恐縮ですが、MBAのパイロット教室として3月に、「学習スタジオ クロスロード」を横浜市内の仲町台にオープンしました。全く、私はかかわりませんが、MBAのスタッフが入会面談や体験授業を行っています。9月頃には、校舎見学ができるようにしたいと思います。その節は、お知らせしますので、ぜひ、見学にお越しになってください。

さて、2月から3月にかけて、学習塾業界で大きな出来事が起こりました。一つは、東証1部上場のリソー教育の粉飾決算問題です。昨年未から、会計上の問題が報道されたリソー教育ですが、2月10日には、粉飾決算の全容が公表されました。そして、3月7日には、証券取引等監視委員会が、リソー教育に4億円強の課徴金と生徒に27億円を返還するように金融庁に勧告しました。学習塾業界の信用性を失墜しかねない大きな問題が起こったのです。

さらに3月1日にも大きなニュースが入ってきました。学習塾業界の社会的評価を下げってしまう事件です。名古屋を中心に展開している「名進研」の豊川社長が、暴力団系列の風俗店グループに6億円もの融資をしていたというニュースです。名古屋で名門と言われた「名進研」を一代で作った氏が、風俗店の役員に名を連ね、暴力団の資金源と思われるところに巨額な融資をしてしまっていたのです。

なおかつ、「名進研」は、学校法人格まで取得して、「名進研小学校」を作ったところですが、教育に携わる人間としては、非常にお粗末な出来事ですが、大きな塾ゆえに起こった事件かもしれません。それにしても、1年で一番大きな集客期にこのような学習塾業界の不祥事が大きく取り上げられるのは大きなマイナスです。またこのよう

なスキャンダルは、学習塾業界の地位を低下させ、塾という存在を貶めるに十分なほどのインパクトがあります。ぜひ、教育に携わる私たちは、社会的に許される道を歩んでいきたいものです。

さて、今回は、具体的に4月に何をしたらよいかを書きたいと思います。題して「4月のTO DO LIST」です。

まずは、学習塾という会員制サービスの本質にかかわる業務から確認しておきましょう。

① 生徒面談

新学期が始まったら、必ず生徒面談をしてください。対象は、小学校高学年から高校3年生までです。

小学生は、これからの学習の大切さと日々の学習時間についての確認、中学生は、年間の成績目標と志望校の提示、そして、最初のテストの目標点数を、そして高校生は、志望校の提示が出来るように、生徒の夢や色々な興味に関する情報収集を、あとは中学生と同じです。

これらの内容について、授業の合間を使ったり、早く来てもらったりして面談を実施し、生徒の学習に対するモチベーションを高めてください。

② DTS

保護者には、DTS（デイリーテレフォンサービス）を行い、春期講習の成果と課題、生徒面談の内容を伝えてください。そして、この1年、「しっかり指導して参りますので、担当の〇〇に何なりとご相談ください」と伝えてください。保護者に徹底的説明責任を果たしてください。

③ 学習ガイダンス

中学生には、学習ガイダンスを行ってください。可能ならば、学年ごとに実施するのが理想的です。「入試の

こと」、「定期テストのこと」、「部活と勉強の両立のポイント」、「教科別の勉強方法」、「内申点のつき方」等々、話の内容を学年ごとに比重を変えてモチベーションを高めてください。生徒面談と学習ガイダンスが上手く出来るようになると、非常に楽な校舎運営が出来るようになるはずです。

④ 有形化

校舎に「合格掲示」や「春期講習の授業風景の写真」の掲示、そして、各生徒の目標を大々的に貼りだしてください。また、先生方のメッセージもいたるところに貼りだして、「新しい学期の始まりなんだ」と意識させてください。

色々な思いを有形化していくことが大切です。学習塾のサービスは、人的サービスが基本ですから形に残りにくいのです。ですから、自塾で行ったことを有形化して生徒や保護者にもう一度思い出してもらおうようにしてください。

⑤ 通信物

毎月、通信物を出すことが難しい塾は、季刊でも構いませんので通信物を出して、教室の雰囲気や様子を保護者に直接伝えてください。教室の様子を保護者は知りたいものです。何か大きなイベント（今回は春期講習や生徒面談、学習ガイダンス、合格実績）があった際には、必ず通信物を作って保護者に伝えていくようにしてください。

次は、集客にかかわる業務を確認しておきましょう。

① 入学式・始業式の校門配布

入学式には、メイン中学校へ出向いて、「入学おめでとう!」の校門配布を行ってください。

配布物は、①あいさつ文 ②通年パンフ ③中学校生活ガイドブック（小学校VS中学校的なものから、高校入試制度のことなど）④合格実績か成績向上の実績⑤無料体験チケット などです。

明るく元気よく大きな声で「おめでとうございます!」とあいさつしながら、生徒だけではなく保護者にも配布してください。

② 定期的な校門配布

校門配布をするときは、心理的なコストの低いものを告知することです。たとえば、「無料授業の招待」とか、「高校入試無料必勝セミナー招待」等のキャッチにしたピラを創り校門配布をしてみてください。4月に数回行なって、5月のテスト対策の校門配布の下見にしてください。校長先生が変わって、学校の先生の態度が以前と変わっているかもしれませんので。

余談ですが、3月31日か4月1日に学校人事が新聞で発表になると思います。そこにも注目です。自塾のメイン中学校の先生の転出入は、関心を持って見てください。

4月から消費税率が上がるので、ちょうど3月のこの時期は、駆け込み需要で問い合わせも比較的順調かと思います。しかし、4月以降は、保護者の通塾マインドは冷え込むことが予想されます。2013年は、結局、3月から12月まで、学習塾に通う生徒数は前年を割ってしまっていました。この傾向は、今年、さらに強くなると予想できます。

ぜひ、自塾の内部充実を図って、生徒・保護者の満足度を高め、口コミを生む努力をしてください。苦しい時代は、適切な行動を取る塾が優位です。ぜひ、新年度に向けて、準備を怠らないようにしてください。

【あとがき】

入試関連業務お疲れ様でした。既に、中・高の入試を終えて、進路が確定した地域もあれば、やっと入試を終え、結果待ちの地域もあるようです。何はともあれ、お疲れ様でした。志望校合格したならもちろん、残念ながら不合格であっても、塾も生徒もやりつくして、生徒や保護者があいさつに来てくれる塾であってほしいと思います。来年度、更に胸を張って生徒や保護者のあいさつを受けることができるように、是非、学習指導、進路指導を振りかえてみてください。

<http://www.management-brain.com/2013/>

電話 045-651-6922 (10:00 ~ 19:00)

e-mail: mailadm@management-brain.co.jp



全国的にも公立中高一貫校への注目が高まっています。本稿では、公立中高一貫校が何故これほどまでに多くの方々の注目を集めているのか、その背景にあるものは何かを見ていきたいと思います。

中学校は義務教育であり、多くの子どもにとっては選択するものではありません。自分が居住する学区内の公立中学校に進学するのが普通でした。中学は近くの学校に行くものであり、わざわざ受験していくものではなかったのです。

中学受験の市場は全国的にあるものではありませんでした。首都圏、関西圏、名古屋、広島そして福岡を中心とする九州地区の一部に私立中学及び国立大学附属中学を対象としてあるくらいで、その他の地域の小学生にとっては地元の国立大学附属中学（とわずかな数の私立中学）受験があるくらいのものでした。

ところが、学校基本法の改正によって、1999年より多くの都道府県に公立中高一貫校が設立されたこと（現在、全国には百を超える公立中高一貫校が存在します）で、公立中高一貫校を受検するという選択が可能となりました。公立中高一貫校を選択すること、ひいては中学を受験（受検）することを意識するようになったわけです。

公立中高一貫校への注目度が増したのは、公立中高一貫校からの卒業生が大学受験において素晴らしい実績を出し始めたことも大きいでしょう。しかし、それだけでこれほどまでに高い注目と広範な関心と呼ぶことはないでしょう。公立中高一貫校独自の中学と高校をトータルに捉えたカリキュラムの下、伸びやかな教育環境が提供されていることが一番大きいのではないのでしょうか。

私たちは中学と高校が別々にあることにそれほど違和感を感じません。ところが、日本の学制の歴史を見ますと、戦前の中等教育は旧制の中学校（5年制）が一貫して担っていたわけです。それが戦後の学制改革によって、義務教育期間を伸ばしたことで、中等教育期が義務教育である新制中学と義務教育外の新制高校に分断されてしまったわけです。私立や公立中高一貫校が実践している中高一貫教育のほうが中等教育という点では、むしろ歴史と正統性がある

ということなのです。

中高が分断した現在の中等教育は、中学3年間の義務教育段階で「一応の」完成を目指す必要があります。そのため、中学と高校でのカリキュラムにどうしても重複する部分（中高一貫教育では「進度」の速さばかりが目立っていますが、無駄のない中高一貫カリキュラムが進度面で速くなるのは、ある意味自然なのです。

公立中高一貫校での、生徒の知的好奇心を掘り起こそうとする様々な試み、それぞれに魅力ある教育像を提示し、その実践に努めているところにこそ注目してほしいのです。グローバルな人材となるために求めるものは何かを想定し、国際化に対応できる人材育成に邁進している学校もあります。社会のリーダーを育成するための人間的基盤を作り、社会貢献に努める人材育成に邁進する学校もあります。公立中高一貫校に対しては、進度よりもむしろ「深度」の面にこそ注目すべきでなのです。

公立中高一貫校の誕生により、義務教育期間である中学校までは決められた学校に進み、自らの意思で学校を選択するのは、高校進学時からという観念から開放されたはずですし、そのような認識をひとまず捨てていただきたいものです。保護者は自らの考え（価値観・教育観）を実現してくれるような学校を、自らの意思で模索することが可能となりました。子どもの将来を考え、魅力ある教育環境を提供するためにも、この権利を行使すること、公立中高一貫校を選択するというには大きな魅力があるのではないのでしょうか。